

蝸牛の塔

岩井 薫

「蝸牛の町」は平原の速くからは巨大な巻き貝を伏せたように見える、例えばすでに山や丘のような地形の一部と化した古代の建築群の廢墟である。対数渦巻き（対数螺旋）の形をとってゆるやかに上層部へ移行する求心的な曲線に氣をとめなければ、それは水河の侵蝕からとり残された硬い岩盤の塚や、火山灰台地に隆起した溶岩丘と容易に見まちがえられた。三層の渦をなして頂が円屋根（ドーム）で蔽われたこの建築物を、いまは滅びたその建造者たちは簡単に、——しかし旧友に対するような愛着をこめて「貝」と呼んでいた。おびただしい遠浅の鹹水湖沼群が、ほろほろに綻びた蜘蛛の巣のように、まるで蜘蛛が老い耄れて修復の意欲を失ったとでもいう具合に、途切れがちに、ときには瘦せこけた川のように細く、ときには小さな海洋ほどの規模に水を湛えて続いている。陸地はおおよそ二種類の部分からなっている。まず大部分を占める白い岩塩層であるアルカリ平原。そしてわずかに点在する、「生きる水」を噴き出す泉地である。「貝」の小さなものは、藪草や葎の群生するこの泉地に近く分布していることが多いが、荒れ果てた平原のまっただ中にも、鹹湖の辛い波が寄せる岸辺にさえも多くの「貝」が見出される。太陽が照りつけている間は湖沼群や白い塩の大地の照り返しと、立ち罩める陽炎、また四六時中現われている蟹気楼のために氣づかないことが多いが、日没の時刻になると遙かな地平線に黒く点々と、驚くほど多くの「貝」の影が見える。そのどの一つも大小の違いこそあれ、様式はまったく同一で、単純至極である。褐色の小さな石が整然と積まれ、間隙はセメントで固め、所々に窓が穿たれて採光の役目を果たしている。渦巻きの下層の端に大きく開いた口は、時には幅二百メートル、高さ百メートルにも及ぶ。それは巨大な幾何学的洞窟の入り口を思わせ、内部は薄暗い迷宮めいて、人を奥へ招く不思議な吸引力をそなえている。建築費の砂塵は山脈から風に運ばれ、白い大地の表面を長い年月をかけて次第に風化し続けて来た。風向きによって砂やすりは「貝」の表面に溝をえぐり、時には内部の空洞を見せる深い傷口を開いてしまう。断崖上などに建てられた「貝」が激しく打撃され続け、崩れはててきれこうべのような無残な外

観を晒していることもある。

「貝」には多くの鳥が棲息している。これはその内部の空洞が強い日射を遮って涼を与え、また昆虫などの餌になる生物も見出されるためである。明け方、地平線を曙光が薄紅色に染める頃になると、「貝」の円屋根の頂に穿たれた天窓から、渦巻きに沿うて並んだ採光窓から、そして下端の大きな洞穴から幾干という鳥たちが羽搏いて飛び立ってゆくような大群棲地もまれではない。このような「貝」の内部は、床石に堆積した鳥の糞を栄養として苔や茸、羊歯類などが一大群落をなし、いわば洞窟泉地のおもむきがある。これは貯水槽や深い井戸などの工夫によっていまだに水が得られる「貝」において殊に著しく、内部を一面の苔や草に蔽われ、季節になれば花さえ咲き乱れている。

「貝」は遥かな遠い昔に一種の城砦都市として建てられた。広い最下層の両壁面に沿うて五十〜六十戸の高状住居があり、その間の広場の中央には「生きる水」を深い地下から汲み出す井戸があった。ゆるやかに傾斜して上昇する第二層には、通路を挟んで家畜小舎、家禽小舎、醸造所、製粉所、パン焼き場などにあてられる部屋がしきられていた。そして円屋根に蔽われた最上層は図書室であった。ここは僧房のように小さくしきられた写本室に囲まれた円形の広間で、写字生たちの労作が巻き物に装幀されて所狭しと積みあげられていた。この部屋の中央に巻き物が置かれていない小さな円形の空間が残され、取り外しのできる床石の一枚を持ちあげると、そこは「穴」に通じている。「貝」のすべての層の内側の壁の裏面が、負の円丘の形をした第二の空洞をなし、「穴」と呼ばれていたのだが、ここは影の地帯、死者たちの領域である。こうして、最後の住人が葬られた後は——他のすべての都市の廢墟がそうであるように、「貝」は墳墓に他ならなかった。

いまでは、鳥や山犬をのぞいては、「貝」を訪れる者は放浪の民だけである。彼等はこの土地を何千キロも、独りで、徒歩で旅する。ごくまれに彼方の岸辺の王国までさまよい出る者もあったが、彼等の行動範囲は原則として「貝」の分布範囲にほぼ一致していると言えよう。男も女も、この一族の者は

胴衣の腰のベルトからナイフと、ふくろねずみの皮の革袋を吊っており、ひつじらくだの皮の外套をまとつて、男は藁草で編んだ、つばの広い帽子かフェルト帽をかぶり、女は腰までのびた長髪をまん中から分け、外套に付いた頭巾で蔽っている。荷を負わせたひつじらくだを連れている者もあるが、多くは狩猟道具やごく少量の携帯食糧を入れた袋を肩から下げて、山犬を警戒しながらただ独りで歩いてゆく。

彼等は複数で行動することはごく稀で、大あほう鳥のように、ごく小さいうちから独りで旅することを覚える。困難な採集・狩猟、あるいは部族の重要な任務のために独りで旅をし、いずれはどこかへ帰還するという性質の旅では決してない。彼等の誰一人として帰還すべき母集団を持つ者はなく、鳥のように「貝」を定住地とするわけですらないのである。この大地が荒れ果てる以前から根をはっていた老樹の蔭、岩棚、海のほとりの砂丘……彼等が夜を過す場所はいたるところにあり、そこで彼等は天幕も必要とせずに、外套にくるまって獣のように息をひそめて眠る。

この平原に「貝」を築いて、湖沼群を平底船で渉った民族は、おびただし幾何学的廢墟を残して大地に不思議な分節を与え、またさらにその先住者であった者たちは、その頃ひろびろとした海洋と群島からなっていたこの領域に——ごく僅かでもかなり風化されつくしてはいるが——港湾施設の遺跡と船の残骸を残している。それに比べて、この放浪の民が減じた後には彼等自身の肉体が——鳥や獣に食われさえしなければ——化石となって残るだけだろう。彼等は書物はおろか、書きしるす文字も、そればかりか何ともおろかなことに自らの言葉も持たないのだ。

彼等はひつじらくだの膀胱で作った袋に同じ動物の乳を容れ、何も無い荒野をわたる時は、七日間もあるいは十日間も、毎日それを一口ずつ飲み、大切にしているが、それを呼ぶ言葉を持たない。あるいはかつては持っていたが、必要がなくなったのであっさり忘れてしまったのである。

ごく稀にだが、しかし確実に、旅の途中で彼等同士が出会うことがある。大さそりを踏まぬように注意深く、狩りの獲物であるふくろねずみやうさぎかもしかを追っている途中、あるいは衣服を全部脱いで湖沼の岸に置き、水中でジャックナイフのように体を焼めて鉛を片手に魚を追っている時、突

然相手の存在に気づく。そのような時、相手が初見参の者か、あるいはかつてすでに会ったことのある者であるかは大した意味をなさない。彼等は相手の存在を意識しつつ、その場で何らかの意思表示をすることは決してなく、相手から一定の距離を保って当面の作業——単に歩いている、あるいは樹の下に坐っていることも含めて——を進行する。彼等は互いに相手から一定の距離を保ちながらその時、その場所に来るのを待つのである。その時、その場所が「満月の夜、貝の一番高い部屋」であるのか、あるいは「満潮時、古代船着き場」であるのかは場合によってことなり、彼等は時としては何日もかかって旅を続けながらその時、その場所に来る。

その時、その場所では彼等は相手を選ばなければならない。このささやかな見合いの選考課目は、しいて言えば一種の踊りとさえなくもない奇妙な儀式に限られており、その表現の仕方は各個人によってことなる。その時、その場所では彼等は互いに演技者、観客となるとも言えよう。すなわち彼等は相手の演技を祝つつ、自分の演技を相手に視られるのだ。何を演じるか、その主題は生と死、自己のあるいは他者の来歴、泉地の夢、神、鳥、魚などさまざまである。表現方法として、箏笛を吹きながらじつと土す者、古代の巻き物にくるまって長時間黙って佇ちつくす者、性行為を模倣する者、「貝」の周囲を疾走する者もいる。この儀式の結果、彼等は相互を選び、あるいは選ばない。選ばれなかった者はただちに踵をかえし、ひつじらしくだの皮外套をひるがえして、遠い砂埃の平原を再びただ独りで歩いてゆくが、選ばれた者ははじめて出会った二疋の山犬のように、ここで敵とならなければならない。

彼等は互いに殺害者、犠牲者となるとも言えよう。胴衣の腰のベルトに吊ったナイフを引き抜き、死に至るまで互いに刺し違えながら、彼等は人稱を交換し、「わたし」と「あなた」の合わせ鏡の間を無限に往復してやがて無限の連続の極小の方へ遠ざかる……

翌朝、地平線に曙光が透み、「貝」に棲む鳥たちはけたたましく囁り羽搏き、まもなく平原中の「貝」という「貝」に棲む鳥たちがただ一カ所を目指して、光溢れる半球を翔けて集まって来るが、群がる鳥たちの翼の下のとこを捜しても、すでに「わたし」もなく、「あなた」もない。